





2003 『賢治のまちから高校生童話大賞』受賞作品

大賞／金の星賞

『Comfortable Doll』

栃木県 作新学院高等学校 一年 山本晴佳

“あなたの大切な人作ります”

大通りから外れた日のあたらない小さな路地裏。ひっそりと刻が止まったようなその中に、時代遅れの骨董店のような店がある。

一枚の紙切れが、その店の薄く色あせてきた木製のドアにはられていた。

“あなたの大切な人作ります”——そのあたたかみのある手書きの文字の横に、それよりやや小さな文字で続きが書かれている。

“当店では生きた人形を作る技術と、人間そっくりな人形を作る技術があります。失った人を取り戻す事ができるのです。”

何度も店とその紙とを見返していると、僕はなんだか不思議の国にまぎれ込んだ気がして、頭を振りながらドアの隣にあるくもったショーウィンドーから中を覗きこんだ。

店内には小さなランプが天井についていて、それによって見た事



もない道具が棚に並べられているのが見える。店の隅の椅子に人が座っているのに気づき、僕は中に入る決心をした。

「すみません……入ります。」

その子はまだ幼い女の子だった。

「店の子？ 僕——。」

話しかけてもびくりとも動かない。そっと触れると、ひんやりとした固い感触がして、どきりとする。

人形だ——。

さわるまで分からないほどその人形は精巧で、粘土でできているようだけど、肌も、髪も、爪の先まで全てが人間そのものだ。

僕は胸の鼓動が高なっていくのを感じた。

もしもこんな人形が手に入ったら、この人形が生きているとしたら——。

「お客さんかね？」

ふいにかけられた声に驚いて振り返ると、一人のおじいさんが立っていた。

手には杖を持ち、丸い銀縁眼鏡が優しそうな目により和やかな雰囲気を与えている気がする。

「その子は人形だよ。あまり強くさわらないでくれ、壊れてしまう。」



僕があわてて手をどけると、おじいさんは人形の前行きしわだらけの両手を叩いた。

「起きなさい、お客さんだ。」

その声に導かれるように人形は椅子から立ち上がり、その反動でかすかにほこりが舞った。そして僕とおじいさんが見守る中で、両手をちよこんと体の前で合わせ、僕にっこりと頭を下げる。

「すごい……っ。」

その動きはどんな高性能で精密なロボットよりもなめらかで、自然だった。

呆然とおじぎを返す僕の前で、おじいさんは人形にお茶の用意をするように頼んでいる。そして人形が奥の部屋へ消えると満足気に口を開く。

「驚いたかね。あの子は私が作ったんだよ。しゃべる事もできる。」

それでどんな人形を作ってほしいんだ？」

「え？」

「そのために店に来たのだろうか？」

それを聞いて僕は戸惑いながらも答える。

「あいつ、写真は明日持って来ます。僕の父さんを作ってください。」

「父さんは一年前に病気で亡くなりました。これが写真です。」



次の日、僕はアルバムにあった一番写りの良いと思われる写真を手に店を訪ねていた。

「一年前か。君は今いくつだ？」

「十三才です。」

「そうか。さみしかったろう。」

「いえ……。」

いつもは哀れみに思えて嫌な気分になるのに、なぜだかおじいさんに言われると悪い感じはしなくて、むしろ心地よく感じられた。

「それでなんのために作ってほしいのだね？ お父さんにもう一度会いたいのかい？」

僕は少し口ごもって、言った。

「母さんのためです。」

「お母さんのため？ 自分のためではなくてかい？」

おじいさんは興味深そうに尋ねる。

「代金はいらさない。君の事情を聞かせてくれ。それによって作るかどう決めよう。」

「……父さんが死んでから母さんが元気がなくなっただんです。笑ってくれなくなりました。」

「お父さんが戻れば直ると思うかね？」

「分かりません。でも何をしたら喜んでくれるか分からないので



す。」

「ふむ。」

おじいさんは考えるように僕を見た。僕はもしおじいさんが気に入らなかつたら人形は作ってもらえないのだろうかと不安になる。

やがておじいさんは髭をいじっていた手を下ろして言った「

「良かろう。人形を作ろう。私の名前はホウドだ。よろしく頼む。」

僕はその答えにほっとして、すぐに返事をした。

「はい、僕はセゴです。ホウドさん、よろしくお願いします。」

こうしてホウドおじいさんと僕の人形作りが始まった。

おじいさんはたくさん粘土を部屋の中央にある大きな木造りの台の上に集めると、僕に次から次へと質問をしてきた。

「お父さんの身長はどのくらいだ？ 体重も教えてくれ。」

「背は僕より頭一つ分くらい高かったから、180くらいかな。」

体重は75キロくらいだと思います。」

「何か体に特長はあったかい？」

「あ、左の手の甲に大きな傷があります。」

「傷？」

おじいさんがおぼろげに人の形をとりはじめてきた粘土から手を離し、顔を上げる。



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

「人指の関節から親指の付け根の下辺りまであるんです。」

僕は指の先で自分の左手をなぞる。

「こう、1センチくらいの幅で、けっこう深い傷です。僕が小さかった頃にキャッチボールをしていて、僕が投げたボールが窓にあたったときにその破片が刺さってしまった。」

おじいさんは再び粘土に視線を戻して左手らしきものを作っている。

「セゴ君はよくお父さんとそういう事をしていたのかい？」

「小さい頃はよく、母さんも一緒に三人で。」

「君にとってお父さんはどんな人だい？」

「どんな人かって言われても……難しいです。これも人形作りに必要なんですか？」

「ああ。その人がどういう人物か分からないと人形も似てこないからね。」

そう言われると答えないわけにいかず、僕は頭の中で父さんについて考えてみた。

「……必要な人です。いなくちゃいけなかった人。……うまく言えなくてすみません。」

「いや。」

ホウドおじいさんは話をしながらも黙々と作業を進めていて、す



ぐに人形らしき形ができていた。けど、まだ、“それ”は粘土で、人には到底見えない。

これがいつかあの人形みたいになるのだろうか――。

ちょうどそのとき、その人形が小さな手でお茶のお代りを持って来てくれた。

『どうぞ。あついから、気をつけてね。』

僕がそれを受け取ると、おじいさんも紅茶のゆげに目を細めて、人形に礼を言う。

「ありがとう、ご苦労様。」

すると人形はうれしそうに笑った。

その屈託のない笑顔に、やっぱり人形に見えないなあと考えていると、ふと思う事があり、おじいさんに尋ねた。

「この子も誰かに似せて作ったんですか？」

僕の問いにおじいさんは珍しく難しい顔をした。

「悪いが、あまり話したくないんだ。」

その様子に僕はいけない事を聞いたと感じ、あわてて謝る。

「すみません、余計な事聞いたりして。人形作り、進めて下さい。」

おじいさんはまた粘土に手を加え始める。

ホウドおじいさんの店に通い始めて五日。





僕は毎日おじいさんの質問に答えていた。

「いつもどんな表情をしていた？」

「手の傷以外に体に特長はあったかね？」

ときにそれは思い出話も交じっていた。

「一番楽しかったお父さんとの思い出はなんだい？」

母さんの話にもなった。

「以前はどんなお母さんだったんだい？」

こういう一つ一つの質問に答える事は、自分の中の気持ちや考えを整理させる事になって、また昔の楽しかった事とか気づいていなかった幸せを実感する

事もできて、僕は家にいる時よりも、そうやっておじいさんの質問に答えている時の方が好きになっていた。

僕とホウドおじいさんと、おじいさんの人形と、粘土の父さん。

それは他の人が見たらうす気味悪い状景かもしれないけれど、僕にとっては心の安らぐ空間になっていた。

彼らはいつもあたたかく迎えてくれるから。

そして父さんの人形はもう着色と顔の細かい部分を残すだけで、

明後日にも完成する。

「ただいま。母さん、いないの？」

返事がないので、僕は自分の部屋に行き鞆を置いて台所に向かう。



中に入ると母さんが涙をぬぐっているのが瞬間見えたが、僕は気づかないふりをした。

「ただいま。」

「お帰りなさい。今ご飯作るから、ちよつと待っててね。」

そう言うと共にかすかにお酒の匂がして、僕はたまらない気持ちになった。

頭の中で真つ赤なものが渦を巻いているようだった。

——— そんな事しないでっ。

「そんなにお腹減ってないからいいよ、僕もう寝る。」

それだけなんとか言って、部屋に行き鍵をかける。ドアの前に座りこんで、窓の向こうを見ながら早く“明日”になるのを待った。

——— 早く店に行きたい。

次の日、学校がない日だったので、僕は夜が明けるとすぐに店に行く事にした。

路地裏を通り、店のドアをノックする。

「おはようございます。」

まだ寝ているかもしれないと思ったが、キイと軋むドアの向こうには、いつもの風景があった。

「おはよう、今日は随分早いね。」

僕はなんだかほっとして、中に入る。



挨拶をしていると、おじいさんの人形が椅子を用意してくれて、僕は礼を言ってそれに腰を下ろした。そして父さんの人形を見る――。

「……………っ、顔、完成したんですね。」

昨日はまだ凹凸のなかった輪郭が今は懐かしい顔立ちに変わっていた。今までもおじいさんの腕の凄さには驚きの連続だったけれど、本当に、今は言葉も出ない。丸い額、少し大きめの鼻、さわると弾力がありそうな頬。

十二年間見ていた顔と違いが見つけれられない。唯一違いを見つけれそうな目も、今はまぶたを閉じていつから見れない。

「着色はまだなんだが、どうだね？」

「そっくりです。色が塗ってあったらきつと、見わけもつかない。」

「そうか。色を塗ったら明日命を吹き込んであげよう。そうしたら動くようになる。」

「はいっ！」

心臓ががドキドキ鳴った。懐かしさと嬉しさと頭がいつぱいでそれしか言えなかった。

これさえあれば、母さんも前みたいに笑ってくれるだろう。

『よかったね、セゴくん。』

側に来ていた人形に、僕は笑い返す。



「さて、それじゃあ色を塗るとするか。セゴ君、肌の色を見せてくれ。」

「はいっ。」

「この色かね？」

「もう少し白いです。……あつ、そのくらいで。」

喜々として作業にかかる僕を見ながら、ふいにおじいさんは言った。

「孫だよ。」

突然の言葉に僕が反応する前に、後を続ける。

「この子は私の孫なんだ。」

おじいさんは父さんの人形から視線をはずさないけど、おじいさんの後ろに立っている人形の事を言っているのが分かる。

「孫……。」

おじいさんは恐らく八十歳をこえているだろう。それに対してこの子は僕より年下に見えるから、たぶん十歳くらい。孫にしても年が離れている気がする。

「知りたいかね？」

心を見透かしたようなおじいさんの言葉に僕は頷いた。

おじいさん達の事、もっと知りたいと思ったし、どうして急に話す気になったのか気になったから。



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

「五十五年前になる。私は結婚して娘を授かった。やがてその子も結婚し子供を産んだ。だがその後すぐに娘夫婦は事故で死んでしまった。」

おじいさんは一呼吸おいて続ける。

「元々妻に先立たれた私の唯一の救いは残されたこの子——孫のユナだけだった。私は人並以上の愛情を注いでユナを育てたよ。

ユナは良い子だった、両親がいないのにいつも笑顔で私を支えてくれた。ユナと過ごした日々は本当に幸せだった……。だがそのユナも十歳のときに病気で死んでしまった……。つ、死んでしまったんだよ。」

そう言っておじいさんはしわに囲まれた目に涙を浮かべながら深いため息をついた。

「人形職人だった私はそれから毎日ユナの人形を作り続けた。朝からまた次の日の朝まで何年も。三年ほどたって、ついにユナと寸分変わらぬ人形ができたとき、私は人形に命を与えられるようになっていたんだ。そしてそれから二十年以上この子と暮らしている。

分かったかね、私とこの子の関係が。この子は私の孫だ。」

そう言っ人形を抱くおじいさんの目には、いつもはなかった、違う、僕が今まで気づけなかった悲しみが浮かんでいた。

何かあるかなとは思っていたけど、ここまでだとは思ってなかつ



た。

「……なんで、僕にそれを話すんですか？」

「君なら……分かってくれるかと思ったんだ。それに……」

……

いや、自分でもよく分からない。」

おじいさんがどんな想いで三年間一人で孫の人形を作り、その後その人形と二人で暮らしてきたか、僕には想像できない。

人形を抱きしめながら、決して止める事なく筆を進め続けるおじいさんの姿がふいに母さんと重なってくる。おじいさんが色を重ねれば重ねるほど、その母さんの影が強くなって、その影が全身に広まった時、僕は母さんをこんな風にしたくないって思った。人形を代わりにして死んだ人の悲しみから一生抜け出せないでいてほしくないって、強く思った。

おじいさんの話を聞いて、初めて気づいた。こんな事、逆に人を不幸にする。

ユナという人形の目は、おじいさんの目と対照的に乾いていた。

その日僕は走って家に帰った。

母さんをおじいさんにしたくない。あんな想いさせたくない。その想いでいっぱい。



「ただいまっ。」

「お帰りなさい、今日は早いね。」

「うん。…………あのさ。」

いざ話そうとして、母さんとちゃんと向き合うのが久しぶりな事に気づく。

前に立っても何と言ったら良いかよく分からない。

「僕…………父さんが死んで悲しかった。」

母さんがはっと顔を上げて僕を見る。その目に訴えかけるように僕は目に力をこめる。

僕は本当は母さんに昔に戻ってほしかったんじゃない。幸せになってほしかったんだ。

「でも僕はもうそんなに子供じゃない、大丈夫。母さんを支えられる。だから一人で抱えこまないで。泣くなら僕の前で泣いて。」

少しでも多く僕の言葉が母さんに届くように、精いっぱい気持ちを込めて言う。

すると母さんはぽつりと咽の奥で言った。

「ありがとう。」

その一言だけで、僕は十分だった。

僕はその後、また店へ向かった。



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

昼間はあたたかく見えた店の明かりが、真つ暗な路地の中でとても頼りなく見える。

ノックをしても返事がなく、鍵はかかっていなかったもので、僕は勝手に店に入った。

初めて店を訪れたときのように、人形は隅の椅子に目を見開いたまま座っていた。

「ごめん、起きてくれないかな。」

おじいさんがやったように手の平を鳴らすと、簡単に人形は動き始める。

「ホウドさんはどこにいる？」

『あっち。となりのへやだよ。』

人形はにこやかだ。僕は少しだけ笑った。

「ありがとう。」

人形の言った部屋のドアを叩くと、すぐにおじいさんが出て来た。

「セゴ君、こんな時間にどうしたんだね。」

まあちようど良い。お父さんの人形が完成したよ。あとは命を込めるだけだ。」

そう言っておじいさんがドアを開こうとしたので、僕はドアの端を持って押し返した。

おじいさんが不思議そうに僕を見る。





「いらないです。せつかく作ってもらったのにすみません。

………僕は完璧な父さんの人形を見たらきつと諦められなくなる。だから……っ。」

「………まあ掛けなさい。」

僕が椅子を寄せて座ると、おじいさんも近くの椅子に腰を下ろした。そうして向き合ったまま時間が過ぎ、沈黙に居心地が悪くなり始めた時、おじいさんが話しかけてきた。

「母さんはどうするんだい？」

僕はこの会話が何かのきっかけになればと思いつながらしゃべる。

「母さんと向き合って話してきました。きつともう大丈夫です。

もしこれで母さんが元気になってくれなくても、僕はもう人形は使えません。

………ホウドさん、やっぱり人形は人形でしかないんです。もうやめましょう。」

「君は強いね。」

おじさんが言う。

「立ち直る強さを持っている。私はもう何十年も立ち止まっているのに。私は、人形でもユナがいてくれないと生きてゆけない。

ユナの人形を失ったらあの子の後を追うしかない。」

おじいさんの言葉に僕は叫ぶように言う。



「ホウドさんっ、ホウドさんは人形と二人でいて幸せでしたかっ！？」

ホウドさんも本当はさみしかったんでしょう？ 人形じゃだめだから僕に話してくれた。ホウドさんがあの話をしてくれなかったら僕も人形に頼ってました！ホウドさんのおかげなんですっ。

僕はホウドさんが好きです。あなたに一生そのままいてほしくない。」

おじいさんは興奮のあまり肩で息をする僕を静かに見ている。

そして再びおきた沈黙の中でおじいさんが涙をこぼした。

「私はずっと君を待っていたのかもしれないな。」

おじいさんはゆっくりと立ち上がって、ユナの人形の前行く。

人形はその

土の目でホウドおじいさんをきよとんと見つめている。

「ホウドさ……。」

おじいさんの銀縁眼鏡の中の目には涙がたくさんたまっていて、それを見て僕も涙がこみ上げてきたけど、二人をしつかりと見たくてまばたきを繰り返す。

おじいさんは人形の肩を震える手で抱きしめた。そして人形は命を抜かれ、その体は次第に固く、ひび割れたものになって、やがておじいさんの腕の中でカラカラと音をたてて崩れていく。



もうおじいさんの胸の中には、何も残っていなかった。

「ホウドさん、母さん最近よく笑うようになったんですつ、それも楽しそうに。」

僕が初めて店を訪れて人形作りを頼んだ日から一ヶ月、僕とホウドおじいさんは年の離れた良き友人としてよく会うようになっていた。

「そうかい、良かったな。」

セゴ君、悪いがこれを表に運んでくれないかね。」

「はいっ。」

おじいさんは店を改装して昔やっていた普通の人形店をやる事にして、店をきれいに片づけている。粘土で小物や雑貨も作る、とはりきっていた。

「ここですねー？」

僕は荷物の入ったダンボールを入り口のドアの横に置く。そこでドアにはりつぱなしになっている一枚の紙が目がいく。

「〃あなたの大切な人作ります〃——か。」

もしかしたらおじいさんは誰かに自分のしている事を止めてほしかったのかもしれない。気持ちを理解してくれる人の手で自分を救い出してほしくて、その人が現れるのをずっと待っていたんではな



いだろうか，そんな考えが浮かんだ。

僕はその紙をはがし紙飛行機にすると，振りかぶって，思いっき  
り空へ投げる。紙飛行機はあつけないほど簡単に飛んで行った。

今日は快晴，路地裏も日がまぶしい。